



Title	大学院修士論文要約 プロレタリアートの独裁と過渡期の教育 : ソ連邦の労農予備校による近代教育理念超克の過程
Author(s)	竹田, 正直
Description	サブタイトル中「労農予備校」のルビ: ラブファーク
Citation	北海道大学教育学部紀要, 8, 252-253
Issue Date	1962-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80998
Type	other
File Information	8_P252-253.pdf



プロレタリアートの独裁と過渡期の教育

ソ連邦の労働予備校による近代教育理念超克の過程

竹 田 正 直

ここでいう「過渡期」とは、資本主義から社会主義への狭義の過渡期を意味する。それはまた近代が超克される過程でもあり、教育思想史の分野でいえば、近代教育理念が超克されるときである。近代教育理念の大支柱としての「教育機会均等理念」と「教育と労働の結合理念」のうち、前者が、ソ連の過渡期の教育実践——とくに、労働予備校の発生、発展、消滅の全過程——を通して、いかに超克され、豊かに内実化されていったかを追求するのが本論の主旨である。

労働予備校を分析の対象としたのは、それが過渡期の教育矛盾を集約的に露呈しており、それゆえに、人民の教育普及と教育内容において、これまでの近代教育史の理念では計ることのできない新しい教育的課題を示しているからである。また、労働予備校はいわゆる「正規」の初等中等教育体系から、はみでるものであるがゆえに、これまでのソビエト教育史研究においては、日本ではもちろん、ソ連でさえその理論的究明がほとんどなされていないからである。

過渡期においては、プロレタリアートの権力が経済の基幹部門を握ったうえ、打倒されたがいまだ残存する強大な資本主義的経済制度と、生まれでたものの、いまだ力の弱い社会主義経済制度との共存競争により、最終的には後者の勝利へと導く経済法則の貫徹がみられる。それはソ連においては「新経済政策」と呼ばれるものの展開過程である。

土台における社会主義的部分が弱い過渡期とくにその初期には、上部構造の果す役割はとりわけ大きい。中でもプロレタリアートが手中にした政治権力の果す役割は、もっとも大きいといわねばならない。その政治権力における過渡期の一般的形態が、プロレタリアートの独裁である。プロレタリアートの独裁の任務は、第一に、ブルジョアジーの反抗を弾圧すること、第二に、労働同盟を強固にすること、第三に資本主義の廃墟の上に社会主義を建設することである。

政治におけると同様、単一の社会経済構成体が発展している相対的安定期に比して、過渡期の教育の役割は一層強大となる。資本主義から社会主義の過渡期には、ブルジョアジーの教育と人民の教育が並存しているが、プ

ロレタリアートの独裁を政治形態とする権力を握った人民の教育が主要な側面となる。過渡期における人民の教育は、二つの任務をもつ、一つは敵対的矛盾の統一であり、それは敵階級の反抗を抑圧するため、かれらの教育権を収奪する側面と、敵対階級の再教育機能、の二つの側面からなっている。他の任務は人民内部の矛盾の統一であり、これは、労働者・農民、とくに後者の一般的文化水準を高めて労働同盟を強固にする面と、社会主義建設のため、生産力発展の核をにぎる基幹要員を、労働者・農民の中から育てるという側面をもつ。

過渡期におけるソ連の特殊性の第一は、その経済的後進性にある。革命前ロシアは、一方の足をおくれた小農経済に、他方の足をかなり集中化した工業におく「中位」に発達した資本主義国であった。第二の特殊性は、革命前の権力が、ブルジョアジー（資本制）とツァーリ（封建制）の癒着によって維持されていたことと、14カ国もの帝国主義諸国に包囲された中で社会主義を建設しなければならないために、国内外の階級矛盾が、広範かつ長期にわたって激化していたことである。特殊性の第三として、人民の教育・文化水準の極度の低さをあげねばならない。権力における資本制と封建制の癒着の反映として、革命直前まで教育制度の中に階級制とともに身分制が温存され、労働者や農民の子弟には高等教育はもとより、中等教育の扉もかたく閉ざされていた。その上ロシア資本主義発展の後進性のゆえに、初等義務教育すら導入されなかったのである。

このような中で、ソビエト政府の初期の教育政策はどのように展開されたか、初代教育人民委員（文部大臣）ルナチャル・スキーの「住民への呼びかけ」（1917.10.29）にもみられるように、教育機会は「すべてのものに平等に与えられる」べきであり、「それができないときはもっとも自然な進学，すなわち能力による進学」が採用されるべきであるという無階級的なものであった。その為、大学開校にかんする人民委員会議（政府）の決定（1918.8.2.）で、プロレタリア階級性が貫徹され、「プロレタリアートと貧農の出身者が無条件に第一番に採用されなければならない」とされた。ところが、大学に殺到した労働者・農民は基礎学力が皆無に近く、講義を聴くことが

できなかった。そこで、自分たの手で、1918年秋から工場やクラブで、学習サークル、講習会を組織していった。このような人民の下からの創造的な学習活動は、革命前における日曜学校や民衆大学運動にみられる反体制教育運動の遺産の豊かな継承にはかならない。

この学習サークルが大学に附設されるようになり、このラボーチイ・ファクリテート・ラフファークが労働予備校（Рабочий факультет=РабФак）と呼ばれるようになった。最初の労働予備校は1919年2月2日、モスクワ商科大学（現在のプレハーノフ名称国立経済大学）に創設された。その後7カ月の各地の実践を経て、1919年9月11日、教育人民委員部はソ連の全大学に、労働予備校を附設することを決定した。

入学資格は「16才以上の工場労働者か、"生粋"の農民であること」さらに「各級党機関、労働組合、村ソビエト、貧農委員会の推せん」を必要とし、知識水準は重視されななかった。大学入学者は、労働予備校卒業生が最優先的に採用され、残りの定員をその他の学校が分けあっていた。労働予備校は「大学プロレタリア化の道具」であり、党派性こそが問題であった。しかし、社会主義建設が進むにつれて、党派性と共に高い知識水準が要求されるようになり、修学期間も3〜6カ月から、3年、4年となり、労働予備校のための予備校や学習サークルが生れるようになった。

教育内容においても「半日労働、半日学習」などの先進的な方法が採用され、労働にかんする科目がはじめて教科プランの中にとり入れられた。

「ソ連における社会主義の勝利」により、階級が消滅し、新経済政策が終り、資本主義から社会主義への過渡期が終ると共に、労働予備校もその任務を終えて1941年に消滅した。この労働予備校の発生、発展、消滅の過程の意味するものは、

第一に、その発生は、変革期における人民の教育要求は多様であり、その自発的能動性によって、自らの力で新しいタイプの学校をつくりあげてことを示している。また、人民の権力は、それを巧みに教育制度の中にとり入れてゆくことによって、過渡期の学校体系は多様なものとなる。この多様性は、基本的には過渡期の経済制度の多様性を反映しているが、変革期にとくに強く発揮される人民の創造性をも無視することはできない。

第二に、その発展で特徴的なことは、1925、26年を境として、これまでの「党派性」、「階級性」の重視から、「高い資質」、「専門性」を重視してきたことである。これは社会主義建設の進展により、プロレタリアートの独裁の第一の任務にかかわって、第二の任務が前面にでてきたことを意味する。教育の分野でいえば、敵対的矛盾の

統一より、内部矛盾の統一の任務が主要なものとなったのである。それはまた、知識の教授における主要な側面が「階級闘争の知識」から「生産闘争の知識」に転化したことを意味するであろう。

第三に消滅および発生、発展の全過程から導きだされるものとして、「能力に応じて全てのものに均等に教育機会を保障する」という、近代教育理念が超克されたことである。「永遠」の自由とか民主主義、あるいは、平等「一般」が存在しないように、教育機会均等「一般」は存在しない。「だれのための」均等であり、不均等であるかという「具体的な」教育機会が存在するのみである。階級が存在する過渡期においては、教育機会均等を無原則に敵階級にまで押し広げることはいくつかできない。これによって、教育の一般的機会均等理念がたとえ一時的に「目的」であるかのように見えても、それはけっして「目的」とはなりえず、あくまでも「手段」にすぎないことが解る。だからといって教育の一般的機会均等理念が階級社会で果してきた積極的な役割を否定するものではない。それは、階級社会において今後より一層有効な国民教育の旗じるしとなるであろう。なぜならば、階級社会の上部構造にも、被支配階級の思想や組織が存在するからであり、そして何よりも、教育の一般的機会均等理念が、相対的な真理を含んでいるからである。

ソ連では、国内外の階級矛盾が、広範に激化していたという特殊性によって、教育機会均等の原則を広げる部分が、相対的に狭められていたが、統一戦線の基盤が広く存在する国々では、より多くの部分に広げられるであろう。また、そのような条件の下では、敵階級の再教育をも充分はたらかすことが可能となる。世界的な規模で階級が消滅した際には、人民の立場に立った教育機会の均等理念すら消滅するであろう。そこにはすでに、教育機会のいかなる不均等も存在しないからである。